

タイ人日本語学習者の「の」の使用 ——2年間の縦断的調査より——

坪根由香里

1. はじめに

準体助詞「の」とそこから派生した「のだ」「のだが」「のか」等の様々な用法は、日本語の文の生成上、重要な役割を持つ。中でも、「のだ」⁽¹⁾は使用が必須のもの、過剰に使用すると本来の意図とは異なるニュアンスになるもの等があり、日本語母語話者の使用に揺れが見られる場合もある。文末表現は実質的な意味が希薄で、他の形式との微妙な意味の違いや使い分けの認知が困難な形式であるため、習得が困難だと言われており(坂本他 2008:121)、「のだ」に関して、実質的な意味の希薄さや機能の複雑さから学習者にとっては習得が困難なものの一つだと言えるであろう。坂本他(2008)では、文末表現の使用は言語能力との関係が強いことが指摘されており、「のだ」に関して、KY コーパス⁽²⁾を分析した坪根(2009)等で、日本語が上級に行くにしたがって使用する用法の範囲が広がることが明らかにされている。

一方、言語習得には十分な言語接触が必要だと言われている。前述の坂本他(2008)では、自然習得者と教室習得者の来日後3か月以内、8か月後を比較し、文末表現の習得には言語能力と十分な言語接触を提供する滞在期間が必要だとしている。また、台湾と日本にいる台湾人日本語学習者を対象に「テイル」の習得について調べた許(1997)は、学習者のレベルがほぼ同じであっても日本にいる学習者の方が正しく使用できるという結果を示している。

このように言語接触の重要性が明らかにされているが、言語接触の限られた海外で学習をする場合、学習者は「の」のどのような用法をどの程度産出できるようになるのであろうか。また、それは言語能力とどのような関係があるのだろうか。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

「の」を扱った先行研究のほとんどは「のだ」に関するものである。大場(1992)は、日本語中上級学習者と日本語母語話者の「のだ」の文法判定テストを行い、初級教科書で導入された用法は日本人と学習者との判定の乖離度が低く、導入されない用法における乖離度が高くなったとして、自然習得について疑問を呈し、教室指導の影響を示唆している。坪根(1997)は、質問紙調査により「ものだ」「ことだ」「のだ」の理解度と産出について調べたものだが、そこでは「のだ」の「説明」「前置き」が最も習得されやすく、理解難易度については「命令」「非難」が続くとされている。譚・仁科(2003)は、日本在住の中国人学習者に対して質問紙調査を実施し、全体的に上のレベルの正答率が高く、「納得・発見」、前置き「のだが」、「のだから」がよく理解

されているが、「のではないか」はレベルが上がっても理解率が伸びないことから習得が困難だとしている。坪根 (2009) は、KY コーパスを使って、「の」の主要な用法についてレベル別の使用状況を調査し、韓国語話者、英語話者、中国語話者の正用状況の共通点として、概ね①代用語、名詞化用法、②「のだ」(説明告白、説明教示)、③「のだが」(前置き、言いさし、逆接)、④「のか」(説明求め)、「というの」(一般化)、「のではないか」(推測、意思・主張)の順に正用が見られるとしている。一方、花城 (2000) は「のだ」の習得についてインタビューによる9か月の縦断的調査と質問紙による横断的調査を実施しているが、縦断的調査の結果からは「説明」、「前置き」、「判断」、「強調」、「確認」の順に多く使用が見られるが、横断的調査では「説明」の得点率が低く、「前置き」も得点率の順番では低くなっていると、他の研究と異なる結果を示している。

使用だけでなく非使用も分析対象とした趙 (2008) は、「のだ」「のか」の使用条件、非使用条件を分類し、その習得状況、習得と日本語能力レベルとの関係について考察しており、日本語能力レベルが上がるにつれて習得が進む用法とまったく進まない用法があること、使用条件より非使用条件のほうが理解度が低いことなどを示している。

一方、自然習得者と教室学習者の事例から日本語の文末表現の習得について分析した峯他 (2002) では、海外で日本語を学習した場合、学習者の使用する文末表現は日本国内での自然習得者に比べて少なく、特に「んです」の習得が難しいとされている。しかし、来日後、日本語環境で生活をし、十分な言語接触が得られた場合、会話に用いる文末表現は増えるとされ、文末表現の習得には言語能力だけでなく言語接触環境も大きく関わっていると述べている。

以上の研究からは、「のだ」の習得には言語能力や言語環境が影響することが窺えるが、これらの研究のほとんどは日本語環境で行われており、言語接触の限られた海外の学習者を対象とし、同じ対象者を継続的に調査したものは管見の限り見当たらない。そこで、本研究では、タイ在住のタイ人日本語学習者を対象に、「のだ」を中心とした「の」の使用について2年間の縦断的調査を行った。本稿では、言語能力と「の」(特に「のだ」)の使用の関係に焦点を当て、その使用状況及び学習者の理解について、その使用例も具体的に見ながら考察する。

3. 調査の概要

タイの大学(以下、X大学)で日本語を学ぶタイ人学習者18名を対象として、2006年1月～2008年2月に計5回、一人につき約30分のインタビュー(ロールプレイ3つを含む)を実施した。インタビューでは調査者からその時々に応じた内容の質問をして、その内容を膨らませるようにし、学習者から調査者への質問もしてもらった。ロールプレイの内容は、5回の調査を通して、①様々な場面での依頼、②状況や出来事の説明、③苦情・文句の3種類とした。2008年2月にはそれまでの内容についてのフォローアップインタビューも併せて行った。また、調査開始時の2006年1月と終了時の2008年2月には日本語能力を判定するためにSPOT(Simple

Performance-Oriented Test) (Ver.A) ⁽³⁾ を実施、終了時には三肢選択テストと自由記述式調査も行った。三肢選択テストでは、自分の選択にどの程度自信があるかも5段階で答えてもらった。

SPOTの結果をもとに、2回目のSPOTの上位・下位各3名、及び1回目から2回目の点数の伸びが大きかったものと小さかったもの（以下、SPOT伸び大/小）各3名を抽出した（各2名は重複していたため、計8名）。学習者別のSPOTの結果は表1の通りである。

表1 学習者別 SPOT 結果

学習者	性別	SPOT 1回目	SPOT 2回目	SPOT 2回の差	SPOT 上位下位	SPOT 伸び
H1	男	32	62	30	上位	大
H2	男	19	49	30	上位	大
H3	女	31	47	16	上位	
H4	女	8	36	28		大
L1	女	6	18	12	下位	小
L2	女	8	25	17	下位	
L3	女	15	28	13	下位	小
L4	女	20	32	12		小

本稿では、①SPOTの点数（上位・下位）、点数の伸びと「の」の使用状況との関係、②用法別使用状況、③三肢選択テスト、自由記述式調査の結果に基づいて考察する。

4. 結果と考察

表2に1回目から5回目のインタビューで出現した「の」の使用数をまとめた。なお、紙幅の関係で各用法の説明は割愛し、できる限り以下の用例の中で示すこととする⁽⁴⁾。

4.1 SPOTの点数（上位・下位）、点数の伸びと「の」の使用状況との関係

SPOT下位の学習者はL2が5回目に「のか」を1回使用している以外は使用がない。L2の使用例(1)は不自然な文だが、「はやく勉強するにはどうするんですか/どうすればいいんですか」とすれば、「のか」の使い方自体は誤用ではない。下位に名詞化用法の使用がないことから、複文の産出能力が低いということが推測される。それに対し、上位3名は代用語、名詞化、「のだ」「のだが」と幅広く使用しており、大きな違いが見られた。中でも、H1は1回目から名詞化、「のだ」「のだが」の使用が見られ、その後も(2)~(6)のように順調に「の」を使った表現を広げている。フォローアップインタビューでH1は、映画を繰り返し見て日本語を勉強し、その中で「んですが」「んです」をよく聞くのでそこから覚えたと言っている。「何やってんだ」(4回目「のだ非難」という表現もそのまま映画から覚えたということである。H1は「のではないか」(6)、H2は「のかスコープ」(7)を学習者の中で唯一使用している。これらは、先行研究でも早い段階では使用されず、習得が困難な用法だとされるが、両者の使用は、海外の環境においても日本語能力が高ければ習得されることを示唆している。(以下、用例中のRは調査者)

(1) L2: 私、私は本、本当に、あ…はやく勉、はやく勉強はどう、どうするんですか?

(L2: 5回目「のか説明求め」)

表2 「の」使用状況集計

正用数(誤用数)

学習者	用法	1	2	3	4	5	学習者	用法	1	2	3	4	5
H1 上位 伸び大	代用語		1			2	L1 下位 伸び小	代用語					
	名詞化	1(2)				2		名詞化					
	のだ説明告白			(2)				のだ説明告白					
	のだ説明教示	1			1			のだ説明教示					
	のだ強調							のだ強調					
	のだ非難				2			のだ非難					
	の다가逆接			1				の다가逆接					
	の다가前置き	1	2			3		の다가前置き					
	の다가言いさし	1		1		2		の다가言いさし					
	のか説明求め							のか説明求め					
	のか非難				1			のか非難					
	のかスコープ							のかスコープ					
	の説明求め					1		の説明求め					
の非難			1(1)			の非難							
の確認						の確認							
のだから						のだから							
のではないか					1	のではないか							
H2 上位 伸び大	代用語		1		2	4	L2 下位	代用語					
	名詞化					2		名詞化					
	のだ説明告白							のだ説明告白					
	のだ説明教示			1*				のだ説明教示					
	のだ強調							のだ強調					
	のだ非難							のだ非難					
	の다가逆接							の다가逆接					
	の다가前置き	1	1	1	2	1		の다가前置き					
	の다가言いさし							の다가言いさし					
	のか説明求め							のか説明求め				1	
	のか非難							のか非難					
	のかスコープ					1		のかスコープ					
	の説明求め							の説明求め					
の非難						の非難							
の確認						の確認							
のだから						のだから							
のではないか						のではないか							
H3 上位	代用語	1			2	4(2)	L3 下位 伸び小	代用語					
	名詞化		1					名詞化					
	のだ説明告白							のだ説明告白					
	のだ説明教示							のだ説明教示					
	のだ強調			1*				のだ強調					
	のだ非難							のだ非難					
	の다가逆接							の다가逆接					
	の다가前置き			2				の다가前置き					
	の다가言いさし			1				の다가言いさし					
	のか説明求め							のか説明求め					
	のか非難							のか非難					
	のかスコープ							のかスコープ					
	の説明求め					1		の説明求め					
の非難						の非難							
の確認						の確認							
のだから						のだから							
のではないか						のではないか							
H4 伸び大	代用語					3	L4 伸び小	代用語					
	名詞化							名詞化					
	のだ説明告白							のだ説明告白			1*		
	のだ説明教示							のだ説明教示					
	のだ強調							のだ強調					
	のだ非難							のだ非難					
	の다가逆接							の다가逆接					
	の다가前置き	1	1	1	1			の다가前置き					
	の다가言いさし							の다가言いさし					
	のか説明求め							のか説明求め	1				
	のか非難							のか非難					
	のかスコープ							のかスコープ					
	の説明求め	1						の説明求め					
の非難				2		の非難							
の確認						の確認							
のだから						のだから							
のではないか						のではないか							

*は調査者の質問の繰り返しとして産出されたもの

正用が出現した用法
初めての正用

(2) R: うーん。ガイドはお金がたくさんもらえるんですか?

H1: はい、タイはそうなんです。(H1: 1回目「のだ説明教示」)

(3) R: え、彼女ですか? もう彼女ですか?

H1: んー、まだわからないんですが。(H1: 1回目「のだが言いさし」)

(4) R: え、今日? 今日ねえ、あと1時間くらい待ってくれたら大丈夫なんだけど。

H1: うん、1時間ぐらい来られるの? (H1: 3回目「の確認」)

(5) R: 来る、来たいと思っています。いいですか?

H1: いいです。

R: よかった。もう<調査者>来ないでくださいって(笑)

H1: (笑) 何言ってるんですか。(H1: 4回目「のか非難」)

(6) つながってるんじゃないですか。(H1: 5回目「のではないか」)

(7) R: どんな先生ですか? 厳しい先生?

H2: いいえ。(笑)(中略) 教える前は、今日は、まず、何を教えるのか、準備したり、学生、学生のごことは、なんか、うーん。(H2: 5回目「のかスコープ」)

H2 と H3 は 2 回目の調査前に 6 週間留学しているが、フォローアップインタビューで H2 は 2 回目で使用している「ちょっとお願いあるんですが」は大学で習ったものだと述べ、H3 は「のだ」「のだが」などを日本で聞いたかという質問に対し、気にしなかったと答えている。共に 2 回目に名詞化の使用は見られるが、「のだ」については留学による直接的な影響は確認できなかった。これは、6 週間という留学期間の短さによるのか、あるいは、留学先機関のプログラムに従っての行動をし、生活環境の中に常時日本人がいる環境ではなかったことによるのかは判断できない。

SPOT の点数の伸びに着目すると、H2 は 1 回目の SPOT では L4 と同程度の点数であったが、その後 H2 は点数が伸び、L4 は伸びが小さい。この 2 名の「の」の使用を比較すると、1 回目のインタビューでは L4 が「のか説明求め」(8)を使用しているのに対し、H2 は使用が見られなかった。しかし、2 回目以降は、H2 は徐々に使用が広がっているのに対し(9)(10)、L4 の方は 3 回目に調査者の言葉の繰り返しが 1 回あったのみで、自発的な使用はない。

(8) (壊れたバイクについて) どうして壊れたんですか? (L4: 1回目「のか説明求め」)

(9) R: 旅行どうだった?

H2: ああ。旅行、ちょっと…。(中略) その時は、友達の財布、友達の財布が、なくしたんです。(H2: 5回目「のだ説明告白」)

(10) あ、ホテルを予約したいんですが。(H2: 5回目「のだが言いさし」)

フォローアップインタビューで L4 は 1 回目の使用について、たぶん新しい文法を習って使おうと思ったのかもしれないが覚えていない、今はいつ使うかわからないと述べている。一方、H2 は、「のだが」はお願いする時、最初にテーマを言う時に使い、「のだ」は理由を言う時に使う

と述べており、自分なりの規則に沿って「のだ」を使用している。この2名の使用状況からは、日本語能力と「の」の使用との関係が窺える。

一方、SPOTでは上位3名には届かず、2回目のSPOTではL4と点数的に大きな差はないが、点数の伸びが大きかったH4は、2回目インタビューからくだけた言い方の終助詞「の」を使って説明を求め、4回目には終助詞「の」を使って「なんで笑うの？」と非難もしている。また、5回目には名詞化の「の」を使い、より複雑な文が作れるようになっている。H4は現地の日本人と積極的に関わりを持とうとし、4回目インタビュー前から日本人とルームメイトになっていることから、日本人からのインプットにより自然な日本語を取り入れているのではないと思われる。

一方で、「辞書形+ん+です」の「ん」が抜けたと考えられる誤用がいくつか見られる(11)。また、「のだ」「のだが」を使った言い方は、依頼の前置きとしての使用しかなく、(12)で「んです」が付けられていないように、カジュアル場面以外での産出は見られない。これは、SPOT上位で伸び大のH2が「のだ」を使用し、終助詞「の」は全く使用していないことと対照的である。

(11) 将来はえ、家族と、えーと、相談しましたことがあるですが。(H4:5回目)

(12) 私の部屋のエアコンは(はい)壊っちゃった。(中略)お湯も熱くない。(H4:5回目)
つまり、H4は日本語のレベルは全体の中で高いとは言えないが、日本人の友人との接触が他の学習者と比較して豊富なことが、丁寧な形の「んです・のです」ではなく、カジュアル場面での終助詞「の」の使用につながっていることがわかる。一方で、H4はSPOTの伸びが大きいことから、日本人との接触が日本語能力そのものに影響を及ぼしている可能性も考えられる。

以上の結果から、全体的には日本語能力と「の」の使用は強く関係していることがわかった。一方で、H4の例は、日本語能力だけでなく言語接触が与える影響も無視できないことを示唆しており、先行研究を支持する結果となっている。

4.2 用法別使用状況

本節では、比較的使用の多い「のだが」と「のだ」「の」の使用状況について考察する。

4.2.1 「のだが」

「のだが前置き」については、使用のほとんどが依頼場面に限られているのが特徴的で、依頼以外で使用しているのはH1のみである(13)。H2、H3、H4は「お願いがあるんですが」という定型表現での使用が多く、H4はすべて同表現、H3は3回目に「お願いがあるんですが」と「悪いんだけど」が使用されているが、その後の産出はない。H2は5回目で「週末なんですが」という表現が表れ(14)、発展的使用が見られる。大学では『みんなの日本語』26課で「んですが」が提出されており、そこでは依頼場面のほかに、質問の前置きとしても示されている。しかし、本調査を見ると、「んですが」はまず依頼場面で「お願いがあるんですが」というチャックとして使われるようになり、その後、依頼場面での他の表現、依頼以外の前置きへと発展している。「お

願いがあるんですが」という表現は、『みんなの日本語』28課の「会話」で依頼場面の会話の初めに「ちょっとお願いがあるんですが」が使われている。X大学ではこの会話を暗記して教師の前で話すことが求められており、恐らくそこで覚えたものが使われたのだと思われる。

(13) さっきホテルに行ったんだけど、チェックインとする時に、私の名前がリストに載ってないんですけど。(H1:5回目「のだが前置き」「のだが言いさし」)

(14) H2: ちょっとお願い、あるんですが。

R: 何ですか?

H2: あの…週末なんですが、あ…私は、クラスメートと一緒に、あ、う、海へ行きますが、休ませていただけませんか? (H2:5回目「のだが前置き」)

このように、「のだが前置き」は早い段階で使用されてはいるが定型表現であり、この用法をその時点で使えるようになっていると言えるかは疑問が残る。「のだが言いさし」を含め、「のだが」をチャンクからより生産性の高い言語構造として使用できるようになっていると思われるのは、SPOT上位のH1、H2のみであり、日本語能力の高さとの関係が認められる。

4.2.2 「のだ」「の」

説明場面での「のだ」の使用はH1、H2のみに見られた。H3の「のだ強調」は、「ぶつかったんですか」という質問に対して「ぶつかったんですよ」と調査者の言葉を繰り返したものであった。「のだ」の使用についても日本語能力の高さとの関係が窺えるだろう。

終助詞「の」については、非難の場面での使用が多く(H1、H3、H4)、自分が説明する状況で使用した学習者はいなかった。非難以外では説明求め(H4(15))、確認(H1(4))の場面で使用され、説明場面では普通体がそのまま使用されている(16)。

(15) H4: 私の本は、(中略)貸しました。読む、あ、読みおわりますか?

R: あ、うーんとねー、読み終わったんだけど、ちょっと今あの一

H4: どしたの?

R: どこに置いたかわからなくなっちゃって、今探してるの。(H4:4回目「の説明求め」)

(16) 偶然、えと、友達の元カノと(笑)会いましたから、ああ、悲しかった。(ああ)で友達は元カノと話していっしょに帰っちゃった。(H4:5回目)

以上見てきたように、「のだ」は説明場面で使われ、終助詞「の」は説明では使用されていないことから、「のだ」と「の」は別の機能を持つものとして認識されている可能性がある。この点については4.3で自由記述式調査の結果と併せて考察する。

本研究では、学習者によって出現傾向の違いはあるが、概ね、代用語、名詞化、「のだが前置き」は比較的早い段階で相前後して使用されるようになり、「のだ説明教示」「のだ説明告白」「のだが言いさし」「のだ・の非難」が続くという傾向が見られた。これは、日本語環境で行われた先行研究と類似しているが、「非難」の用法が早い段階で産出される点は異なっている。「非難」の用法

は、H1 は映画から、H4 は日本人の友人からインプットを得ており、海外の環境でも十分なインプットがあればその産出は可能であることが示唆されたと言えよう。

4.3 三肢選択テストと自由記述式調査

表 3 は三肢選択テストの正答・誤答傾向をまとめたものである。「のだ説明告白」、「のだ前置き」は SPOT 上位・下位に関わらず正答傾向があった。つまり、下位の学習者は知識としては得ているが、それが使用につながっていないと言える。「のだ非難」、「のだ確認」は上位は正答傾向、下位は誤答傾向だが、インタビューでもこれらは上位のみが使用しており、下位の学習者に対しては、知識面からも適切な指導を行う必要がある。「のだ説明教示」に関しては、H1 はインタビューで正しく使用しているにもかかわらず、三肢選択テストでは誤答を選んでいった。これは、「どうして？」という質問に対する選択肢が（わけだ／ことだ／のだ）となっており、理由を答えるものとして「わけだ」を誤って選択したものと思われる。

表 3 三肢選択テストの結果のまとめ

上位・下位に関わらず正答傾向	のだ説明告白、のだ前置き、のだ強調
上位・下位に関わらず誤答傾向	のだ命令、のだ意思決意、のだ説明教示
上位は正答傾向、下位は誤答傾向	のだ非難、のだ確認

自由記述式調査では、どんな時に「のです」「んです」を使うか、どんな時に「の」を使うかを自由に記述してもらった⁽⁵⁾。調査者は「のです」「んです」を同じものの文体上の違いとして示したつもりであったが、「のです」は代用語の「の」+「です」、「んです」は強調、説明、理由述べ、気持ちや意見を述べる等で使用すると記述した学習者が多かった。この記述も正しいものであるが、「のです」が「んです」と同じ機能を持つ表現であるという認識がない人が多いということがわかる。この調査では、SPOT 下位の学習者も、「知りたいこと、疑問に思ったことをたずねる。(例：どうしてがっこうにやすんだんですか。)」(L1)、「せつめいしたいの時。(例：もし日本でべんきょうしたいですが、どうやってするんですか。)」(L2)、「つよいかんじる。(例：私の本は今どこにあるんですが。)」(L2)、「とても知りたい時使う。きちんと熱心に答えた。い。(例：きょうは何を食べたいんですか。ソムタムを食べたいんです。)」(L3)と記述しており、「のだ」によって付加される機能について、ある程度の理解は認められる。

一方、「の」は「聞く時 (例：明日はどこ行くの?)」(H4)、「話し言葉の質問。(例：いつかえるの?)」(L1)、「疑問文の後につけるときに使える。(例：さくぶんをしないの?)」(L4)のように、話し言葉として質問をする時に使うと書かれており、これはインタビューで「の」を使っ

た非難、確認がすべて疑問形であったこととも合致している。L3のみが「質問の強さのレベルが上がる（強く聞きたい）。（例：どこにいるの。）」と記述して、「の」が持つ機能について触れていたが、L3は口頭での使用には至っていない。

以上の結果からは、「の」に対応するものは「のだ」ではなく、ます形だと認識されていると推察される。つまり、本来の「のだ」の機能は「んです」の形として認識され、「の」は単にカジュアルな疑問文にするためのもの、「のです」は「んです」とは別のもので、「の」＋「です」だと考えられているようである。そのためにインタビューの中で終助詞「の」は説明場面では使用されなかったものと思われる。また、自由記述式調査からは、SPOT 下位の学習者も「んです」についてある程度の知識を持っていることが窺えた。これらの学習者には、知識が使用につながるように、場面を設定した意識的な練習が必要なのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

本研究からは、日本語能力と「の」の使用は関係しており、海外の環境でも能力が高ければ様々な用法の産出が可能であることがわかった。一方で先行研究で指摘されているように、言語接触が与える影響も無視できないことが示唆された。特に言語接触の限られた海外では、限定されたインプットの質が産出に与える影響が大きいことが窺える。また、H1は映画やドラマから日本語を学んでおり、日本人との接触がH4ほど多くなくても、日本語との接触を意識的に心掛けることが「の」の使用に結び付くと考えられる。記述式調査の回答からは、インタビューで「の」が出現しなかった学習者も理解には至っている用法もあることがわかり、それらは適切な練習により産出につながる可能性がある。さらに、「の」と「のです」「んです」は、対応するものでなく別の機能を持つものとして捉えられていることがわかった。

本研究は、日本語が日常的に使用される環境ではないタイの日本語学習者を対象に2年間に渡って調査を行っている点ではこれまでにない研究であると言えよう。しかし、一機関の学習者を対象としており、上記特徴がこの機関の学生のみのものであるのかは、他との比較によって慎重に検討する必要があるだろう。また、海外における日本語教育を考えるにあたっては、教室指導の影響もさらに調べる必要があるだろう。本研究は、日本語能力に焦点を当てて分析を行ったが、今後は言語環境が習得に与える影響について検証するため、2回目の調査後に日本に1年間留学した学習者との比較によって、分析を行うつもりである。

注

- (1) 特に指定しない限り、「のだ」には「んだ」「のです」等、文体上異なるものも含める。
- (2) 「KY コーパス」とは、鎌田修氏と山内博之氏を中心に作られた OPI の文字化資料を指す。
- (3) SPOT テストは日本語学習者の日本語能力を簡単に測定するテスト法で、これまでの研究

- では高い信頼性を得ており、外在基準のテストとの相関も高い。いくつかの種類があり、Ver.A は初級文法項目が 2/3、中級文法項目が 1/3 含まれている (フォード丹羽・酒井 1999)。
- (4) 「のだ説明告白」は「話し手だけが知っているはずの情報を聞き手に提出する」もの、「のだ説明教示」は「聞き手が知らないことが確実であると思われる情報を話し手が提出するもの」である。各用法の詳細については、坪根 (2009) 参照。
- (5) 回答は日本語またはタイ語で書かれており、タイ語のものは翻訳を依頼した。日本語で書かれたものについては原文通りに記載する。

参考文献

- 大場理恵子 (1992) 「『のだ』文の用法と教科書分析及び習得過程について」(第四回日本言語文化学会発表要旨) 『言語文化と日本語教育』第4号、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp50-55
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断的研究」『日本語教育』第95号、日本語教育学会、pp37-48
- 坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新 (2008) 『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』、スリーエーネットワーク
- 譚芸穎・仁科喜久子 (2003) 「中国人日本語学習者『のだ』の習得状況に対する考察—アンケート調査の結果から—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.10 No.2、pp12-13
- 趙萍 (2008) 「中国人日本語学習者における『のだ』『のか』の習得—使用条件と非使用条件をめぐって—」『日本語教育』第137号、日本語教育学会、pp11-20
- 坪根由香里 (1997) 「『ものだ』『ことだ』『のだ』の理解難易度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』第1号、凡人社、pp137-156
- 坪根由香里 (2009) 「OPI における中国話者の『の』の使用状況」『早稲田日本語教育学』第4号、早稲田大学日本語教育研究センター、pp43-55
- 花城可武 (2000) 「『のだ』文の習得—縦断的調査と横断的調査の結果を通して—」『南山日本語教育』第7号、南山大学大学院外国語学研究科、pp32-47
- フォード丹羽順子・酒井たか子 (1999) 「学習時間数と SPOT 得点の関係—インドネシア話者およびタイ話者に対する SPOT の実施結果より—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第14号、筑波大学留学生センター、pp109-119
- 峯布由紀・高橋薫・黒滝真理子・大島弥生 (2002) 「日本語文末表現の習得に関する—考察—自然習得者と教室学習者の事例をもとに—」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』(平成 12~13 年度科学研究費補助金研究萌芽の研究 研究成果報告書 課題番号 12878043)、pp64-85